〔研 究 ノ ー ト〕

房総半島における縄文時代生産活動の様相

— 縄文時代中期から後期前半における生産用具組成の在り方 —

野　口　行　雄

挿図目次

第1図　遺跡分布図 ……212
第2図　遺跡別生産用具組成図(1) ……217
第3図　遺跡別生産用具組成図(2) ……219
第4図　遺跡別生産用具組成図(3) ……225
第5図　遺跡別生産用具組成図(4) ……227
第6図　地域別生産用具組成図 ……231

表目次

第1表　遺跡別生産用具組成表(1) ……216
第2表　遺跡別生産用具組成表(2) ……218
第3表　遺跡別生産用具組成表(3) ……224
第4表　遺跡別生産用具組成表(4) ……226

1．はじめに

近年の縄文時代文化研究は、低湿地遺跡や貝塚のような我々に与える情報資料の豊富な遺跡調査例が増えつつある中で、従来より縄文時代文化研究の主流をなしてきた土器型式研究と視点の異なる研究、いわゆる「古環境復原」への研究が積極的に行われつつある。この研究については、以前より幾人かの研究者により進められてはいたが、ここ数年における福井県鳥浜貝塚、埼玉県寿能遺跡、石川県真脇遺跡などに代表される低湿地遺跡の調査の成果によりおびただしい人工・自然遺物や生々しいままの生活跡を私たちは目にすることができ、新鮮な驚きをも与えた。このような遺跡については、考古学者のみならず自然科学者らにも多く注目され、各分野の研究者により過去になく豊富な古環境についての情報が提供されつつある。しかしこのような古環境の復原が具体的になりつつある段階においても、その環境下における人間行為との相関関係を具体的に表わせないのが、現在の縄文文化研究の現状である。このことは今日までの縄文文化研究において、遺跡より出土した遺物（土器、石器、骨角器、木器等）に対し、それらを生活用具とした認識に基づいた研究の欠如が大きな要因となっていると言えよう。我々人類が生活して行く上で最も重要な行為として、食料の獲得が上げられる。そして人類が作り出した道具の多くは、この食料獲得のためのものであり、それら道具の進歩・発展は人類の文化の形成、発展に大きく寄与しているものと言えよう。このことは現在の我々の持つ文化にもあてはまることでもあるが、狩猟採集経済が基盤となった縄文時代において食料獲得のための道具、いわゆる生産用具とその文化はより密接な関係にあったものと思われる。よって生産用具の研究は、縄文時代文化の新たなる一端を究明するのに重要かつ必要な研究法と言えよう。

本稿では、房総半島といった限られた地域における縄文時代中・後期の遺跡より得られた石器・骨角器等の生産用具を分析し、各遺跡における総体的な生産用具の在り方を把握して、この地域における生産活動の一端を明らかにしてみたいと思う。

2．生産用具の分類と組成

a．生産用具組成の把握

縄文時代の生産用具として石器、骨角器、木器等が上げられるが、遺跡に遺存しているものの多くは石器であり、その他の骨角器、木器等については、その遺存状況に特別な自然的条件が加わった時のみ遺跡内に遺存されるため、生産用具の研究の主体となるのは石器研究であることは言うまでもないことと思うが、遺存されなかった生産用具の存在も常に考えに入れてお

かなければならない。

石器の研究については、多くの研究者により進められ今日まで至ってはいるが、その基礎的な問題とも言える石器の機能・用途について不明確な点が多く、今だに推測の域を脱していないのが現状であろう。このような基礎的問題が解決されていないまま、さらに論を進めた生産活動について触れることは非常に危険性を含んだものと思われる。しかし生産用具としての石器は、それ自体がある機能をもつことはもちろんであるが、生産活動（狩猟活動、漁撈活動、植物採集活動）には一連のいくつかの段階に分けられる作業工程が考えられ、その各段階に機能の異なる道具が使用されたものと考えられるので、たとえ個々の道具の機能に異差が見られたとしても、一つの生産活動内の一連の作業工程の中で用いられたものであれば、なんらかの相関関係が認められるものと考える。つまり一つの遺跡内より出土した石器等の生産用具により、その遺跡における生産活動の様相を把握するには、それら生産用具の個々に持つ機能・用途を知ることと同時にそれら生産用具がいかなる組み合わせによって成り立っているのかを知ることが必要なことであり、この双方の研究が並行して進められることにより、より具体的な機能・用途が、そして生産活動の様相が明らかになるものと考える。現段階での石器の機能・用途の研究は、顕微鏡的観察や実験的観察により進められ、どのような使用がなされた道具であるのかといった使用法についてはかなり具体的な成果が得られている。しかしその道具がどのような対象物に対して使用されたかと言った「用途」については、今だ推定の域を脱していないのがこの研究の現状である。一方生産用具の組み合わせの研究については「石器組成論」として極く少数の研究者により研究されてはいたが、古環境の復原といった研究が盛んに進められるようになった最近になって本格的な研究が始められたと言えるもので、土器研究偏重主義にあった縄文時代文化研究の中において最も遅れている研究分野の一つと言っても過言ではない。

b．生産用具の分類

縄文時代の生産活動は、狩猟活動、漁撈活動、植物採集活動の大きく３つの活動に分けられる。そしてさらにこの３つの生産活動の補助的生産活動（道具の製作、舟等用具の製作など）とも言えるものが付け加えられる。狩猟・漁撈・植物採集活動に使用された道具は、食料の捕獲・採集に直接的に係わるものと捕獲・採集した食料に対して加工・調理に係わるもの、言い換えるならば、間接的に係わったものとに分けることができる。例えば狩猟活動の場合、その生産活動の工程として、獲物の捕獲作業、解体作業、調理および加工作業が考えられる。捕獲作業は、直接的生産活動と言えるものでありこれに使用した道具を直接的生産用具とし、後の２つの作業は間接的生産活動でありこれに係わる道具を間接的生産用具とする。このような考えに基づいて各生産活動ごとにそれぞれの道具の分類を行ってゆくことにする。

なおこの分類方法は小林康男氏（1974年）のものを参考とした。

Ⅰ　狩猟活動用具

A　直接的生産用具ー a 石鏃　b 石槍

B　間接的生産用具ー c 石匙

Ⅱ　植物採集活動用具

A　直接的生産用具ー a 打製石斧

B　間接的生産用具ー b 石皿　c 磨石　d 凹石　e 敲石

Ⅲ　漁撈活動用具

A　直接的生産用具ー a 銛・ヤス　b 釣針　c 石錘・土錘　d 軽石・浮子

B　間接的生産用具ー e 貝刃

Ⅳ　補助的生産活動用具

a 磨製石斧　b 石錐　c 砥石　d スクレイパー　e 礫器　f 剝片・その他

Ⅰ類の狩猟活動用具には直接的生産用具として石鏃・石槍が上げられ、間接的生産用具として石匙が上げられる。石槍は縄文時代を通して量的に少なく、使用された時期にも片寄りが見られる。これに対して石鏃は縄文時代全般に渡り量的にも多く普遍的に見られる石器であり、この時代の狩猟活動において主流をなした石器と言える。石匙については、捕獲した動物の解体処理に有効な機能をもった石器と考えられているが、房総地方においては、一遺跡内から出土する石鏃など直接的生産用具の数に対し非常にその数が少ないことから、この石匙の他に大形のスクレイパー・剝片類や石鏃の一部のものが、動物の解体処理作業の道具として使用されていた可能性も充分に考えられる。

Ⅱ類の植物採集活動には直接的生産用具として打製石斧が、間接的生産用具としては、石皿、磨石、凹石、敲石が石器として上げられる。植物採集活動の直接的生産活動には、クリ、ドングリ、クルミなどの堅果類の採集、野菜等の蔬菜類の採集やイモ等の地下茎、球根類の採集が考えられる。この他に栽培という大きな問題が加わるが、これについては縄文文化研究において今後の大きなテーマの一つと言え、慎重かつ充分な研究がなされるべき問題であり、今回この問題については保留として、先に上げた３つの植物採集について考えて行くことにする。これらの植物採集活動に使用された直接的生産用具は、狩猟・漁撈活動のものと比べあまり加工等を要しない簡単な道具の使用か、または全く道具を用いずに人力のみにより行われたと考え

られ、石器としてとらえられるものはほとんどないと言えよう。ただ地下茎、球根類を掘り出す道具として打製石斧が機能的に有力なものと考えられている。このような直接的生産用具の在り方に比べ、間接的生産用具は量の差こそあれ多くの遺跡より普遍的に見られることから、植物採集活動については、直接的生産活動の段階より間接的生産活動の段階において、より具体的、特徴的な生産活動の在り方が我々に把握できるものと思われる。この間接的生産活動とは、採集された植物を食料として加工・調理される段階のものであり、ここにおける生産用具の組成上の特徴は、加工・調理方法における特徴を表わすものと言えるであろう。植物の加工・調理に使用された用具としては、石皿、磨石、敲石、凹石が上げられる。これらの石器の用途として植物等の破殼、製粉等の加工・調理具と考えるのが最も妥当とされているが、それ以外のいくつかの用途を持った多面的機能を有する石器であることは言うまでもなく、今後これらの石器の機能的研究において充分に考慮しなければならない問題である。この4つの石器はそれぞれが単一の機能を有しているようにとらわれるが、実際に石器を観察すると単一的機能のみを有すると思われるものはほとんどなく、多くのものは複数的機能を有している。しかしそれら複数的機能については、この4つの石器が持つとされる機能の範囲内に納まるものであることから、この4つの石器の用途において相互に強い関係のあったものと言えるであろう。現段階では、石皿と磨石をセットの用具としてとらえるのが妥当と思われ、凹石、敲石もこれに付随するものと考える。

Ⅲ類の漁撈活動には、直接的生産用具として銛、ヤス、釣針が上げられ、またその一部分を示す石錘、土錘、軽石、浮子が上げられる。銛、ヤス、釣針については形態的に現在使用されているものと比較からその用途が明らかにされている数少ない縄文時代の道具と言えるが、その素材が骨角を用いることが多いため、出土例に制限があり、遺跡内におけるこれら道具の生産用具組成上で占める割合等を知るうえで不安定なものと言える。石錘、土錘については、漁網等の漁具に係わる錘と考えるのが妥当とされている。しかし漁具以外の用途を説える者もいるが、この用具の出現、発展、普及のあり方が、貝塚や他の漁撈具のそれとほぼ一致するためやはり漁撈活動に関係の強い用具と考えるのが適切と考える。以上述べた5つのものが我々が知ることのできる主要や漁撈具である。しかし現在行われている漁撈活動を見ると、その対象となる捕獲物により、採魚活動、採貝活動、採藻活動の大きく3つに分けられる。縄文時代においてもこれと同様な漁撈活動が行われていたことは、道具や貝塚に見られる多量の捕獲物の残骸によって充分に考えられるものであるが、先に上げられた5つの漁撈具はいずれも採魚具であり、採貝具、採藻具の存在も当然考えなくてはならない。これらは木や植物繊維等の遺存率が低いものを素材にしたのであろうか、現在のところ出土例は全く見られない。つづいて間接的生産用具として貝刃を上げたが、これについての用途は不明な点が多く断定はできないが、

魚の鱗を取ったり、肉を切ったりしたものと推測されるものである。この貝刃と同様な用途に用いられた石器として、スクレイパー、大形剥片が充分に考えられよう。

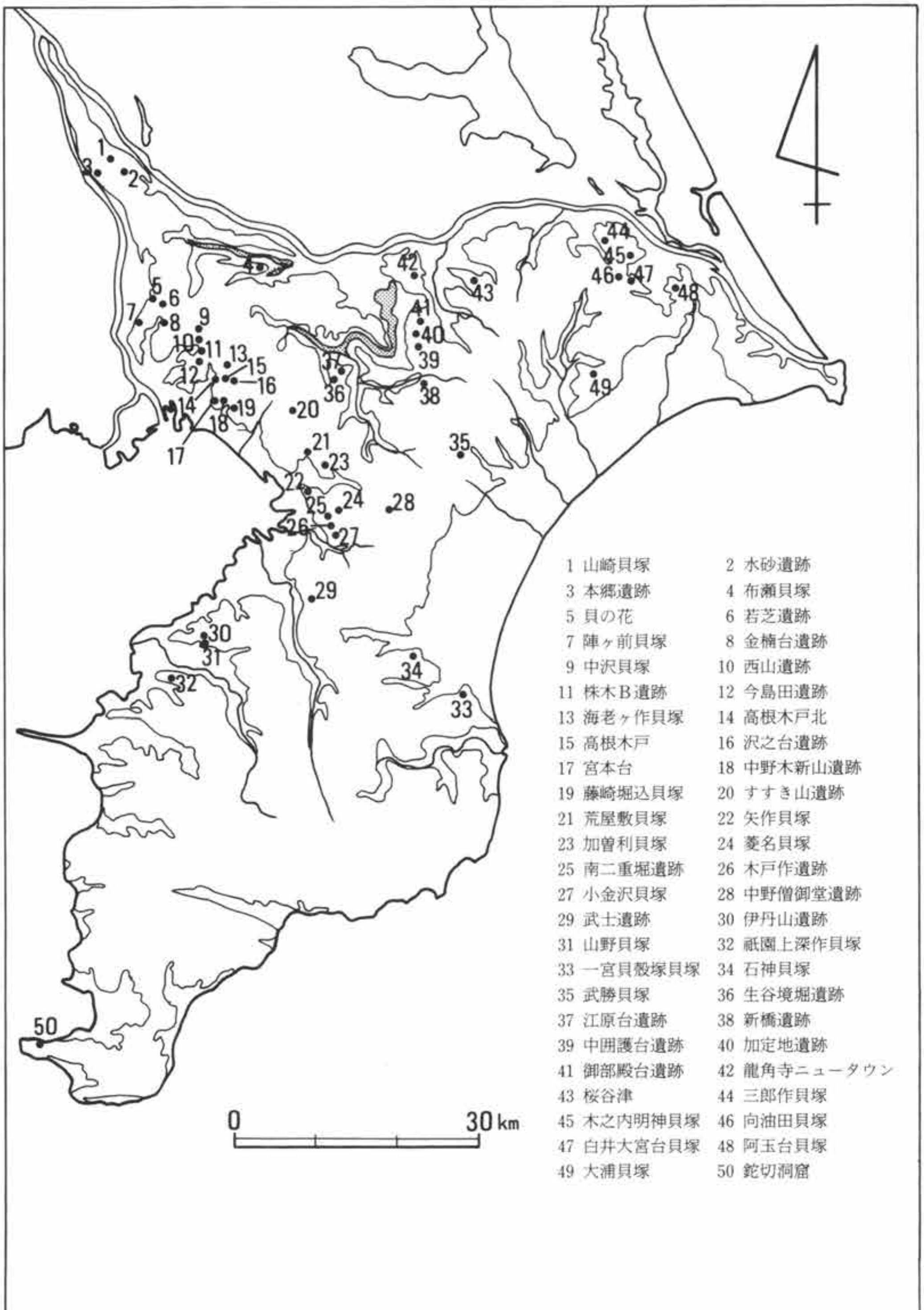
Ⅳ類の補助的生産用具は、Ⅰ～Ⅲに上げた食料の獲得およびその調理・加工と言った生産活動に対して、石器、骨角器、木器等の道具の製作や舟、住居の製作、構築と言った食料獲得活動の補助的な位置にあると言える生産用具であり、磨製石斧、石錐、砥石、スクレイパー、礫器、剥片等の道具がこの用具の多くを占めると考える。この他にも石器製作に使用されたと思われる骨角器などもあろう。磨製石斧はその機能において、樹木の伐採等を対象とした「マサカリ的」機能をもったものと、木製品の加工等を対象とした「手斧的」機能をもったものの2つに大きく分けられる。また、機能面ではこの2つの機能を有するものであるが、その使用方法において柄を付けずに「クサビ」として使用されていたものも多く見られる。いずれにしろこの石器が樹木及び木製品を対象としたものと言え、使用頻度が高い石器である。磨製石斧以外の石器についても道具の製作以外に、我々が生活して行くうえで必要な衣、食、住のうち衣、住に係わりの強い道具であったと言えよう。

3．各遺跡における生産用具組成と生産活動

a．生産活動地域の想定

生産活動の在り方を把握するには、当時の人々がその対象とした自然環境についても充分にふまえて行われていかなければならない。房総半島と言った限られた地域においても地理的・地形的特徴によりいくつかの地域に区分でき、当然自然環境においても多少の相違があったものと思われ、その相違はその自然環境下に棲息する動植物相にも影響を及ぼしたものと思われる。このように地理的・地形的条件の異なる、そして動植物相の異なる自然環境は少なからずその中で生活を営む人々の生産活動のあり方に影響をもたらしたものと言えよう。生産活動の地域的独自性は、その地域に作用する複雑な自然的条件とその中で生活する人々が伝統的に養なってきた道具の使用法や食料獲得方法といったものにより表わされるものと考える。そしてそれらの地域が、相互に影響を与えつつ発展、展開していったものであったと考えられよう。

房総半島は、海に囲まれた地域であり自然のもたらす影響力は山岳地域などと比較して非常に強く受けたと言える。縄文時代の自然環境は現在我々の周囲に見られるものと異なった様相であったことは充分に理解されてはいるが、動植物相、海岸線等の具体的現象については、今後の資料の蓄積を待たなければならない。縄文時代は気候の変化が激しい時期であり、そのため沿岸部においては、海進・海退現象が幾度となく繰り返され、海進時には現在と比べ海岸線はかなり内陸部まで入り込み、縄文時代前期の最大時では、現在の東京湾が埼玉県の浦和、大


1 山崎貝塚
2 水砂遺跡
3 本郷遺跡
4 布瀬貝塚
5 貝の花
6 若芝遺跡
7 陣ヶ前貝塚
8 金楠台遺跡
9 中沢貝塚
10 西山遺跡
11 株木B遺跡
12 今島田遺跡
13 海老ヶ作貝塚
14 高根木戸北
15 高根木戸
16 沢之台遺跡
17 宮本台
18 中野木新山遺跡
19 藤崎堀込貝塚
20 すすき山遺跡
21 荒屋敷貝塚
22 矢作貝塚
23 加曽利貝塚
24 菱名貝塚
25 南二重堀遺跡
26 木戸作遺跡
27 小金沢貝塚
28 中野僧御堂遺跡
29 武士遺跡
30 伊丹山遺跡
31 山野貝塚
32 祇園上深作貝塚
33 一宮貝殻塚貝塚
34 石神貝塚
35 武勝貝塚
36 生谷境堀遺跡
37 江原台遺跡
38 新橋遺跡
39 中囲護台遺跡
40 加定地遺跡
41 御部殿台遺跡
42 龍角寺ニュータウン
43 桜谷津
44 三郎作貝塚
45 木之内明神貝塚
46 向油田貝塚
47 白井大宮台貝塚
48 阿玉台貝塚
49 大浦貝塚
50 鉈切洞窟
0
30 km

第1図　遺跡分布図

宮まで達し奥東京湾を形成していたことが確認されている。霞ヶ浦・利根川下流域や九十九里沿岸地域でも規模の差こそあれ同様の現象が見られたであろう。このように海進に形成された湾や入り江は、後に来る海退時にラグーンを形成し、動植物や人間に新たな環境を与えたと考えられる。この進退は縄文時代中期から後期にかけて1つの頂点があり、この時期はラグーンが非常に発達した時期と言え、特に魚貝類の棲息に大きな影響を与えたと言える。このような自然的条件をふまえて縄文時代中期から後期にかけての房総半島の地理的・地形的地域区分を想定してみると、A）奥東京湾奥部地域、B）奥東京湾沿岸地域、C）東京湾沿岸地域、D）印旛・手賀沼周辺地域、E）利根川下流域、F）内陸地域、G）九十九里沿岸地域、そして東京湾外湾沿岸地域、房総丘陵地域に分けることができよう（第6図）。この内の東京湾外湾沿岸地域と房総丘陵地域については、ここに所在する遺跡の資料が、本稿を進めて行くうえで不充分であるために、今回はA～Gまでの地域における石器を中心とした生産用具組成を見て行くこととする。

b．各地域における生産用具組成と生産活動（第2～6図、第1～4表）

房総半島では、縄文時代中期から後期にかけて遺跡数は急激に増加する。その数は全国のどの地域と比較しても非常に密な地域と言える。しかしその非常に多く所在する遺跡の中で、現在の私たちがその内容を知ることができるものは極めて一部の遺跡しかなく、すでに消滅したものや未調査の遺跡が多くを占めている。また遺跡の分布状況についても、近年の遺跡調査の多くが開発に先行して実施されているものであるため、開発の盛んな地域とそうでない地域とにおいて遺跡分布密度にかなりの差が生じている。房総半島ではA・B・C地域は早くから開発が行われた地域であり、またD地域もここ数年の間で盛んに開発が行われてきた地域であるため、これらの地域に遺跡が集中した分布状態を呈している。また調査が実施された遺跡についても調査の対象が遺跡全体とした大規模なものから遺跡の極く一部にとどまった小規模なものとがある。このように条件の異なる調査成果に基づいて、各遺跡の比較を同一線上で行うこと、そして遺跡の多くが単一時期にのみ営まれたものでなく幾つもの時期に渡って営まれていることから、石器等の道具が使用された時期を断定することが困難なことなどのいくつかの問題点、疑問点が上げられよう。そこで、このような現段階における問題点、疑問点を充分に踏まえて、その多くは推測、推量の域を脱しえないものと思われるが、房総半島における生産用具組成とそこから考えられる生産活動の在り方を見てゆくこととする。

○阿玉台期

本期に属する遺跡はわずか9遺跡を数えるのみであり、本期の生産用具組成を見いだすのに充分なものと言えない。この中において比較的集中して遺跡が見られるのがE地域である。この地域における生産用具組成では、Ⅰa・Ⅲab類と言った狩猟・漁撈活動に関する直接的生産

用具が大きな割合を占めているが、それ以上にⅣ類が大きな割合を占めている。このⅣ類がこれほど多くの割合を占める生産用具組成は他の地域では見られないことであり、E地域における大きな特徴と言えよう。またこの地域に見られる石斧の多くは、縄文時代早・前期に多く見られるような片面を主とした礫器状のものや局部磨製石斧状のものであり、これも他の地域に見られる撥形、分銅形と言った打製石斧とは形態を異にしたものである。このように本期におけるE地域は、房総半島では非常に独自性の強い地域と言えよう。これに対し他の地域では、Ⅰa・Ⅱa類が大きな割合を占めるといった共通性は見られるが、各遺跡において比較的独自の生産用具組成が強く見られ、均一化の傾向はあまり強くは表われていない。このことは阿玉台期における生産活動が各地域に即したものが営まれていたと言えるであろう。しかし生産活動の中心は、いずれの地域においても狩猟・漁撈活動であり、特に漁撈活動については、前段階期と比べ土錘の量が急増することや貝塚を伴う大集落が見られるようになることから、本期においてかなり急速な発展が見られた活動と言えよう。植物採集活動については、Ⅱa類は比較的大きな割合を占めているもののⅡbcde類は少ない割合でしかなく、狩猟・漁撈活動と比べればそれほど活発に行われていなかったようである。しかし縄文時代前期に比べればその割合は大きなものとなっている。このように本期における生産用具組成にはⅠa類に見られるような前期的特徴と、漁撈活動の発達、Ⅱabcde類の増加と言った中期的特徴が見られる。このことは本期が前期的生産活動（狩猟主体の生産活動）から中期的生産活動（漁撈、植物採集主体の生産活動）への過渡期であったと言えよう。

○加曽利E期

本期は阿玉台期と比較し、遺跡の数が急増し、その中には高根木戸遺跡、加曽利貝塚に代表されるような大規模な集落、貝塚が多く見られるようになる。この多くの遺跡の分布は、B・C地域に集中しており、この東京湾東岸地域が本期における中心的生活空間であったと考えられるが、先にも述べたように他の地域については、今後の資料の増加が待たれる。

A地域については、本期の生産用具組成をうかがえるのは山崎遺跡（遺跡番号1）のみであるが、同地域にある阿玉台期の水砂遺跡(2)、本郷遺跡(3)に比べⅡabcd類の占める割合がさらに大きくなり、植物採集活動の活発化がうかがえる。この地域の前期黒浜期と阿玉台期、加曽利E期の生産用具組成を比較すると、Ⅰ類についてはそれほどの変化が見られず、Ⅱ・Ⅳ類に変化が見られる。これは黒浜期の本郷遺跡A地点では、Ⅰa・Ⅳac類が主体となる前期的組成の典形をなしているのに対し、阿玉台期では、先にも述べたように前期の特徴を保ちながらもⅡ類が台頭する傾向が強く見られるようになる。そして加曽利E期では、Ⅱ類特にⅡbcdeが組成の主体を占めるようになり、前期のものと逆転した傾向を示めす。よって狩猟活動にはそれほどの変化が無かったと言えるが、Ⅱ類特にⅡbcde類の台頭は植物採集活動における調理・加工

の方法になんらかの変化が生じた結果とは考えられないであろうか。本地域における漁撈活動については、資料が不充分のため不明である。

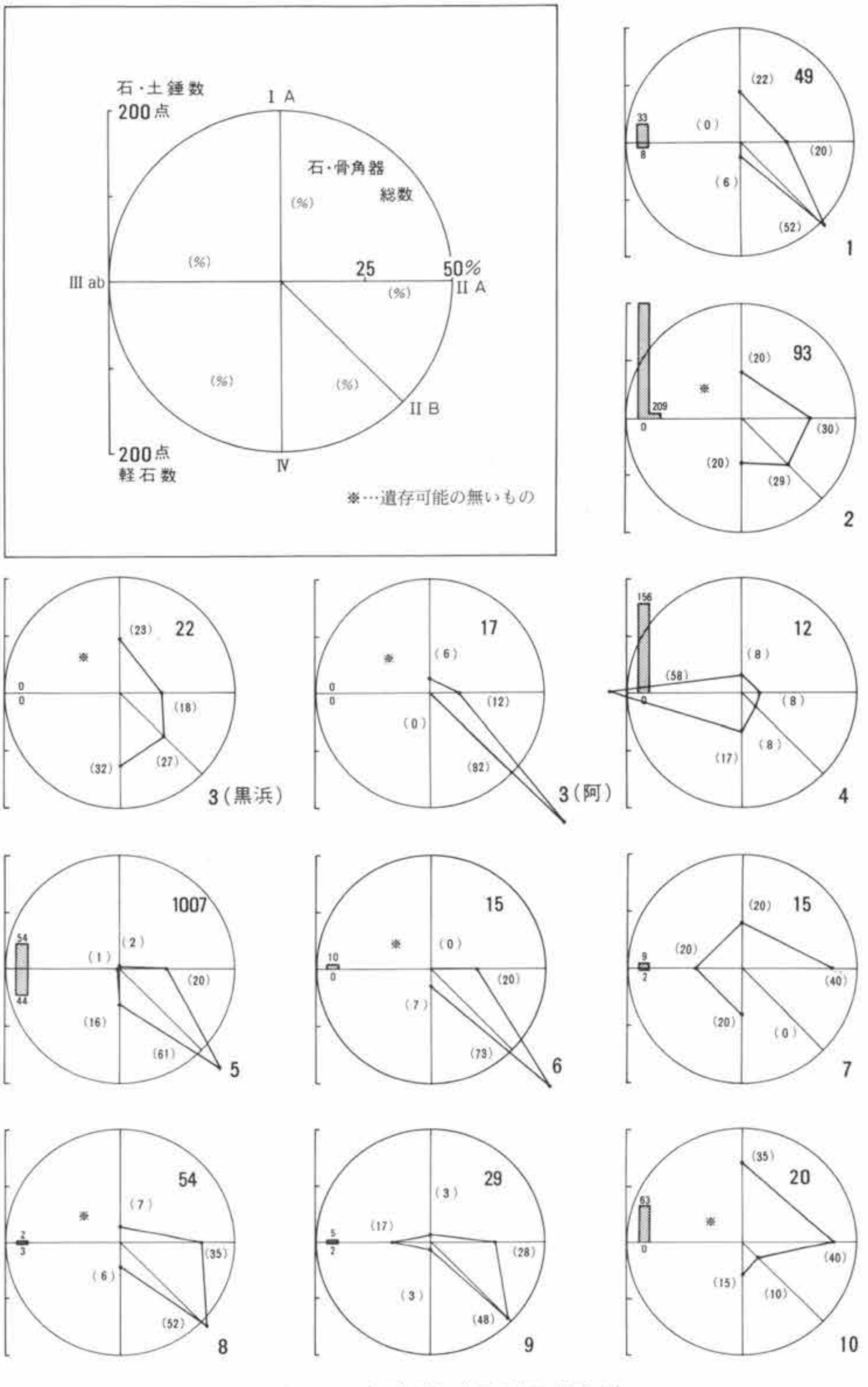
B地域については、本期の中心的地域の1つと言え、今回取り上げた遺跡は、今島田遺跡(12)、海老ケ作貝塚(13)、高根木戸北遺跡(14)、高根木戸遺跡(15)、沢之台遺跡(16)、中野木新山遺跡(18)の6遺跡である。これら遺跡に見られる生産用具組成の特徴として各遺跡ごと多少の差異は見られるものの、Ⅰa・Ⅱa・Ⅱbcde類が大きな割合を占め、特にⅡa類の量的増加は前段階と比べ飛躍的に増える傾向を示し、高根木戸遺跡では130点以上の数を数える。このⅡa類の増加に従うようにⅡbc類も増える傾向を示している。この傾向は、Ⅱa類とⅡbc類が特に強い関係にあったものと言えるであろう。Ⅱa類の打製石斧はその主たる用途が土掘り具であると考えられること、そしてⅡbc類の石皿、磨石がセットとして植物等の製粉作業等に使用されたものと考えられることからこれらの飛躍的増加は、植物採集活動が草根類の採集に力を注がれたと言えよう。そしてこのことは本期において植物採集活動に大きな変化が生じたと考えられるもので、またⅡa・Ⅱbcde類がⅠa類をはるかに凌ぐ遺跡が多くなることから、生産活動自体に変化が生じた時期と考えられるのではないであろうか。つづいて漁撈活動については、今島田・海老ケ作・高根木戸遺跡で多量の土錘が見られ、中でも高根木戸遺跡では600点以上を数え、漁網による漁撈活動はさらに発展したものと思われる。また貝塚が多く見られ、その規模も拡大することから採貝活動も活発に行われていたと言える。以上のように本期におけるB地域では、狩猟・漁撈・植物採集活動に、より発展が見られ、特に漁撈・植物採集活動では飛躍的なものが見られる。このような生産活動の発展は、生産方法の技術的向上と、それを生かすことのできた自然環境によりもたらされたものと言え、本期に集落の急増、拡大がなされたことは、それを支えるだけの生産基盤が確立したためであろう。

C地域は、B地域と同様本期における中心的地域である。今回取り上げた、すすき山遺跡(20)、荒屋敷貝塚(21)、加曽利貝塚(23)、菱名貝塚(24)、南二重堀遺跡(25)はいずれも千葉市内に所在する比較的近い位置にある遺跡である。これらの遺跡の生産用具組成の在り方は、共通性を多く持つものであるが、生産用具の比率に多少の相違が見られることから、それらを3つの様相に分けることができる。荒屋敷・すすき山遺跡では、Ⅰa・Ⅱa・Ⅱbcde・Ⅳabc類がほぼ同じ比率であるのに対し、加曽利・菱名貝塚ではⅡbcde類が、そして、南二重堀遺跡ではⅣae類が全体の50%近くまたはそれ以上占めている。この生産用具組成の示す様相は、荒屋敷・すすき山遺跡においては、狩猟・植物採集活動への労力がほぼ同等にはらわれていたと言えよう。一方加曽利・菱名貝塚については、Ⅱbcde類が顕著に多いことから植物採集活動に多くの労力を注ぎ込んだと言えよう。この植物採集活動はⅡa類がそれほど多くの割合を占めていないことからB地域とは異なり、草根類の他に木の実、蔬菜類といった多様な植物を対象としたものであ

第1表　遺跡別生産用具組成表 (1)

番号		1	2	3		4	5	6	7	8	9	10	11	12
遺跡名		山崎	水砂	本郷		布瀬	貝の花	若芝	陣ヶ前	金楠台	中沢	西山	株木B	今島田
時期		加E	阿 原加	黒浜	阿	阿	称・堀I	加E	称・堀	称	堀	阿	堀I	加E
I群														
A	a 石鏃	11	19	4	1	1	15		2	4	1	7	2	25
	b 石槍			1					1					
B	c 石ヒ		3	1			3							
II群														
A	a 打斧	10	28	4	2	1	(200)	3	6	19	8	8	10	32
B	b 石皿	11	1		3		159	5		6	8		11	5
	c 磨石	5	9	6	7		(250)	2		6	4	2	3	23
	d 凹石	11	9		2	1	(98)	4		4	2		5	7
	e 敲石		8		2		22			11			7	6
III群														
A	a 銛・ヤス等		※	※	※	6	9	※	3	※	5	※	※	
	b 釣針		※	※	※	1		※		※		※	※	
	c 石・土錘	33	209			156	51	10	9	2	5	63	3	146
	d 軽石	8					44		2	3	2		9	10
B	e 貝刃・斧等		※	※	※	1	1	※		※		※	※	35
IV群														
a 磨斧		3	19	2		2	(68)	1	2	2		2	11	24
b 砥石				1			88						3	2
c 掻器類				5			8			1		1		
d 錐											1			
e 礫器									1					
f 剥片その他			多数							11			7	

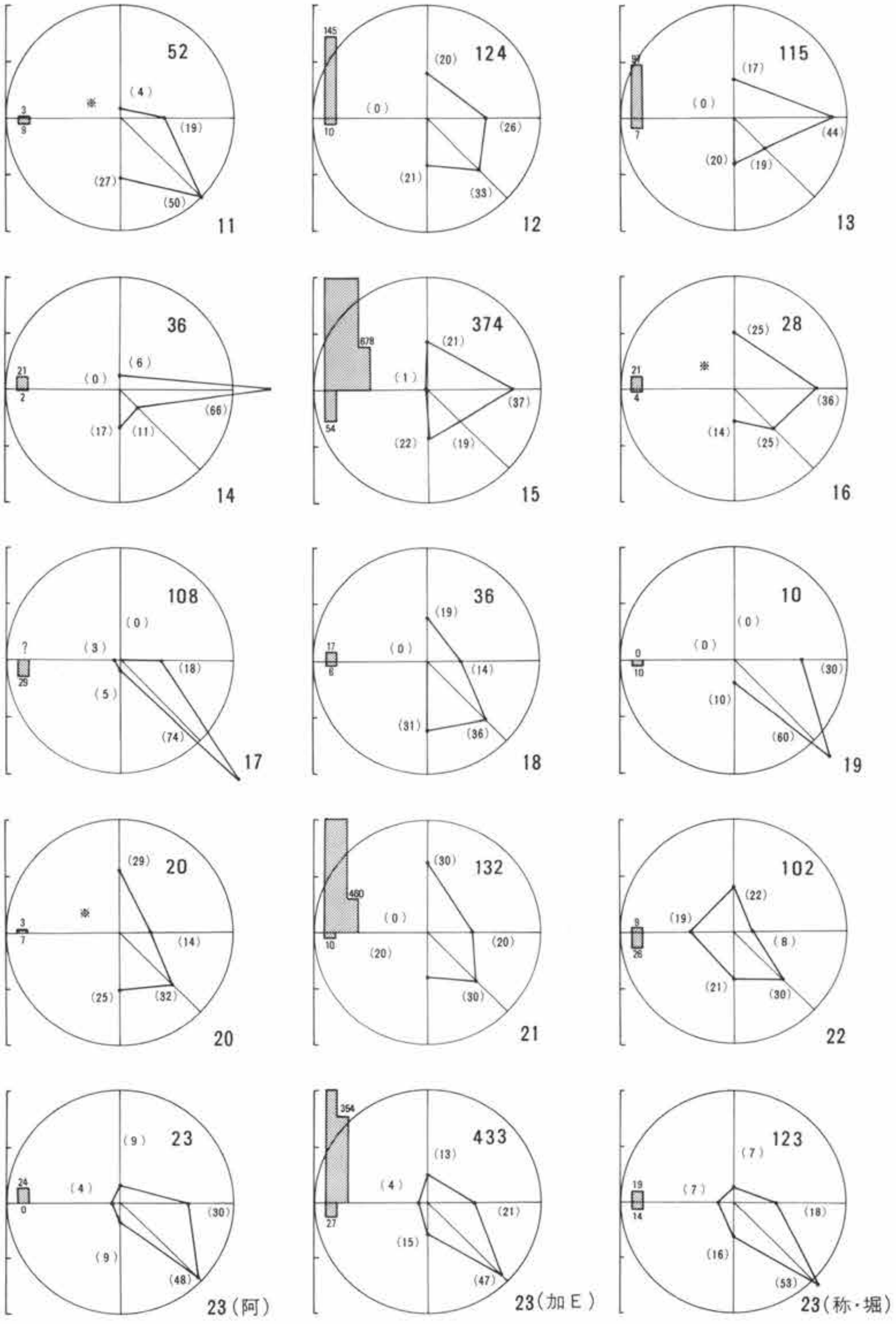
※…遺存の可能性の無いもの　(　)…概算



第2図　遺跡別生産用具組成図 (1)

第2表　遺跡別生産用具組成表 (2)

		13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23			24	25	26
		海老ヶ作	高根木戸北	高根木戸	沢之台	宮本台	中野木新山	藤崎堀込	すすき山	荒屋敷	矢　作	加曽利			菱　名	南二重堀	木戸作
		加　E	加　E	加　E	加　E	堀	加　E	堀	加　E	加　E	堀	阿	加E	称・堀	加　E	堀	堀
Ⅰ群																	
A	a	19	2	78	7		7		8	39	21	1	55	8	2	8	
	b			1								1	1				
B	c						1			1			1			2	
Ⅱ群																	
A	a	51	24	137	10	19	5	3	4	(26)	8	7	91	22	2	11	44
B	b	6	2	21		25	5	2	2	7	9	1	59	13		5	62
	c	7		(33)	3	39	8	3	2	17	13	6	90	24	5	13	100
	d	5		2	3	(7)	(1)	1	4	13	3	1	28	21	3		26
	e	4	2	(16)	1	(9)			1	3	5	3	16	3	5	4	3
Ⅲ群																	
A	a			3	※	2			※		17	1	9	8	1	※	1
	b				※	1			※		2		10			※	
	c	97	(21)	678	21	?	17		3	460	9	24	354	19	16	81	1
	d	7	2	54	4	29	6	10		10	26		27	14	1	3	4
B	e			2	※	3	1		※	1	2	22	395	101	4	※	
Ⅳ群																	
	a	17	6	80	3	1	5	1	4	25	10	1	53	13	2	27	11
	b								3		8			6	1		7
	c	5		4	1		3			1	2	1	9	1			
	d	1					3				1						
	e					5										2	
	f	1							3	1	32	6	68	4		2	5



第3図　遺跡別生産用具組成図 (2)

ったろう。そして狩猟活動については、けして衰退したとは言えず、加曽利貝塚では50点以上の石鏃が出土し、シカ、イノシシといった獣骨も多く検出していることから、依然盛んに行われていたことがうかがえる。ただ植物採集活動の方がより優位な生産活動となったと言えよう。つづいて南二重堀遺跡では、IVae類が主体となっていることから補助的生産活動が活発に行われていたと言えるが、この生産活動は狩猟・漁撈・植物採集活動といった主要的生産活動があってはじめて成り立つ生産活動と考えられるため、この生産活動に多くの労力が注がれたことは、それに対応する主要生産活動が行われていたと考えられる。そこでこの遺跡に多く見られる生産用具として土錘が100点近くあることから、漁撈活動が主要生産活動であったと考えられ、補助的生産活動の多くは漁撈活動に係わったものと言えるであろう。この地域における漁撈活動については、土錘の量が多く、南二重堀遺跡で81点、加曽利貝塚で354点、荒屋敷貝塚で460点を数え、そしてクロダイ、スズキといった内湾性魚類の魚骨が多量に検出されていることから、漁網による採魚活動が活発に行われていたことがうかがえる。また加曽利貝塚では、ヤス、釣針といった漁具も比較的多く見られることから、漁網とは異なる採魚活動も行われていたと言えようが、B地域を含めた他の遺跡においてあまりこれらの漁具が見られないことから、本期では、ヤス、釣針を用いた採魚方法はまだ一般的な方法と言えなかったようである。また採貝活動も遺跡に残された貝の量を見れば、活発に行われていたことがわかる。採集された貝は、ハマグリ、アサリ、シオフキ、ハイガイ等の内湾砂泥性のものが主体となっており、この地域にこれらの貝が棲息するための充分な自然環境がそなわっていたと言えよう。以上のように加曽利E期のC地域は、海への進出がめざましく、植物採集活動の発展、そして狩猟活動も従来通りになされていた地域である。しかし、近接したこれらの遺跡の生産用具組成の様相に多少の相違が見られることは、同じ自然環境下に生活を営んだ集団において、生産活動の在り方（方法、手段）に多少の差異があったものと言えるであろう。そしてこのことは、本期において生産活動の均一性の傾向にある中で、まだ小地域において伝統的とでも言えるその集団独自の生産活動の在り方が存続していたと考えられないであろうか。

D地域では、生谷境堀遺跡(36)、江原台遺跡(37)、中田護台遺跡(39)、龍角寺ニュータウンNo.4地点遺跡(42)の4遺跡が上げられる。これらの遺跡における生産用具組成ではＩａ類が大きな比率を占める共通性が見られる。II類については、IIａ類にＢ・Ｃ地域で見られたような量的増加はなく、IIbc類にも多少は増える傾向はあるもののそれほど端的にあらわれていない。IV類では、IVａ類がほぼ全体を占めIVcd類がわずかに加わるのみである。III類では土錘が多く見られる。このような組成の様相から、D地域では狩猟活動がかなり活発に行われ、植物採集活動では、IIａ類は少ないが、江原台遺跡では19軒の住居跡に対し108基の貯蔵穴が有り、その中の1基よりヒメグルミが出土し、また龍角寺ニュータウンNo.4遺跡でも15軒の住居跡に対し貯蔵穴

が200基余り有り、やはりその中の1基より木の実が多数検出されていることから、この地域における採集植物の対象となったものは、堅果類が主要であったと言えよう。漁撈活動については、土錘が多く見られることから漁網による採魚活動が活発に行われていたと思われるが、貝塚の存在が少なく、その規模も小さいことから採貝活動については、それほど活発にはなされていなかったようである。このようにD地域の生産活動は、B・C地域のものとかなり様相を異にしたものと言える。この相違の最大の要因は自然環境の違いによるものと言え、海岸に接した地域と湖沼・小支谷に接した地域の違いとも言えよう。またD地域の大きな特徴の1つとして石器総数が非常に少ないことが上げられ、次の段階の称名寺・堀之内Ⅰ期になるとこの特徴ははっきりとあらわれてくる。

E地域は、木之内明神貝塚(45)、白井大宮台貝塚(47)の2遺跡のみであり、充分な理解は得がたいと思われるがこの2遺跡を見る限りにおいては、Ⅳ類が大きな割合を占める阿玉台期のものと同様の生産用具組成である。木之内明神貝塚ではⅠ類が1点の出土もなく、Ⅱa・Ⅲa・Ⅳa類がほぼ同じ割合いを占める。Ⅱa類については、阿玉台期で述べたようにこの地域特有の打製石斧である。この打製石斧については、形態的に見て土堀り具とは考えにくく、礫器と同様な加工具として使用されたものと思われる。このことはⅡbc類がこの遺跡より全く出土していないこととも関係づけられるであろう。この遺跡での生産活動を考えるならば、漁撈活動に最も力が注がれたことが土錘の数やⅢa類によりうかがえ、特にⅢa類の量的増加が目につく。貝塚より検出された魚骨にもクロダイ、スズキが多いことから内湾性漁撈が主に行われていたことがわかる。狩猟活動についてはⅠ類が全く見られないが、イノシシ、ニホンジカなどの獣骨が量的に多くはないが検出されていることから、なんらかの形で行われていたのであろう。植物採集活動はそれほど活発化、発展したものと言えない。一方の白井大宮台貝塚では対照的にⅠa類が多く、またⅠb類も見られることから狩猟活動が比較的活動に行われていたと言える。植物採集活動については、木之内明神貝塚と同様なことが言え、漁撈活動については、土錘、ヤスの量は少ないが木之内明神と同様にこの遺跡の主体となった生産活動であったと考えるのが妥当と思われる。このようにE地域は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ類は阿玉台期とあまり変化が見られず、Ⅲ類に多少の変化が見られ、より発展する傾向を示す。このことは、漁撈活動がこの地域における生産活動のうちの大部分を占め、狩猟・植物採集活動はその補助的に営まれたものと考えられるのではなかろうか。そしてこの漁撈活動の発展は、加曽利B期の大倉南貝塚期において頂点に達したものと言えるであろう。

G地域には、大浦貝塚(49)のみであり、出土した生産用具もわずか9点と貧弱であるため、この遺跡をもってこの地域の特徴は述べられないと思われるが、ただ言えることはこの遺跡の生産用具組成の在り方がE地域と似た傾向を示していること、そして両地域が地理的に近く、地

形的にも似た条件下にあることからG地域でもE地域と同様な特徴をもった生産用具組成であったと言えるかもしれない。

以上加曽利E期の各地域ごとの生産用具組成から考えられる生産活動の在り方とその特徴を見てきたが、今回分けたA～G地域は、生産活動の在り方、特徴からA・B・C地域、D地域、E・G地域の3地域にまとめることができる。A・B・C地域は東京湾沿岸に接する地域であり、本期の中心的地域である。ここでは、漁網やヤスを用いた採魚活動やハマグリ、キサゴ、アサリ等を主体とした採貝活動といった内湾性の漁撈活動とイノシシ、ニホンジカの捕獲を中心とした狩猟活動、そして蔬菜類・堅果類・地下茎、球根類等の植物採集活動のいずれの生産活動も活発に営まれていた。特にこの時期に起こった海退現象は、広大なラグーンを形成し、豊富な海の幸を生みだしていたであろう。この海といった豊富な食料資源を持つ新たな生産活動領域に積極的に人々が進出していったことがこの地域において、多くの集落、大規模な集落を営むのを可能にしたと言えよう。これに対しD地域は、東京湾、太平洋からやや遠い位置にあり、ラグーン形成はそれほど大きなものでなかったと思われ、あまり海の恩恵を受けられなかった地域だったであろう。ここでの生産活動は、狩猟がいぜん活発に営まれ、植物採集活動では堅果類の採集を主としたものであったと言えよう。先にも述べたようにこの地域において土掘り具としての打製石斧が少なく、このことはE地域にも言えることでもあり、この縄文時代中期を代表する石器である打製石斧が房総半島に普及し活用されたのは、本期ではA～C地域までと言えるかもしれない。もしそうであるならば、そこに植物の採集方法に大きな違いがあったと考えられよう。漁撈活動については、内湾性の漁撈活動が主に行われていたと思われる。E・G地域は、海への依存度が高かった地域と言え、狩猟・植物採集活動があまり発展する傾向がみられず、漁撈を専業的に営んだ地域とも言え、房総半島において最も漁撈活動の発展して行った地域である。このように加曽利E期の房総半島では、海への依存度の高い地域と言えようが、自然条件の違いにより地域ごとにその地域に即した独自の生産活動が営まれたと考えられ、均一化の傾向が強まる中で、それぞれの地域的独自性がまだ明確に把握できる。

○称名寺・堀之内期

縄文時代中期から後期に移ると、房総半島における遺跡数は2倍以上の600遺跡余りを数えるようになり、その内の⅔以上は貝塚を伴うものである。そして600余りの遺跡の半分以上が東京湾沿岸地域に分布する。このように房総半島での縄文時代文化は後期に至って最も栄えたものとなる。

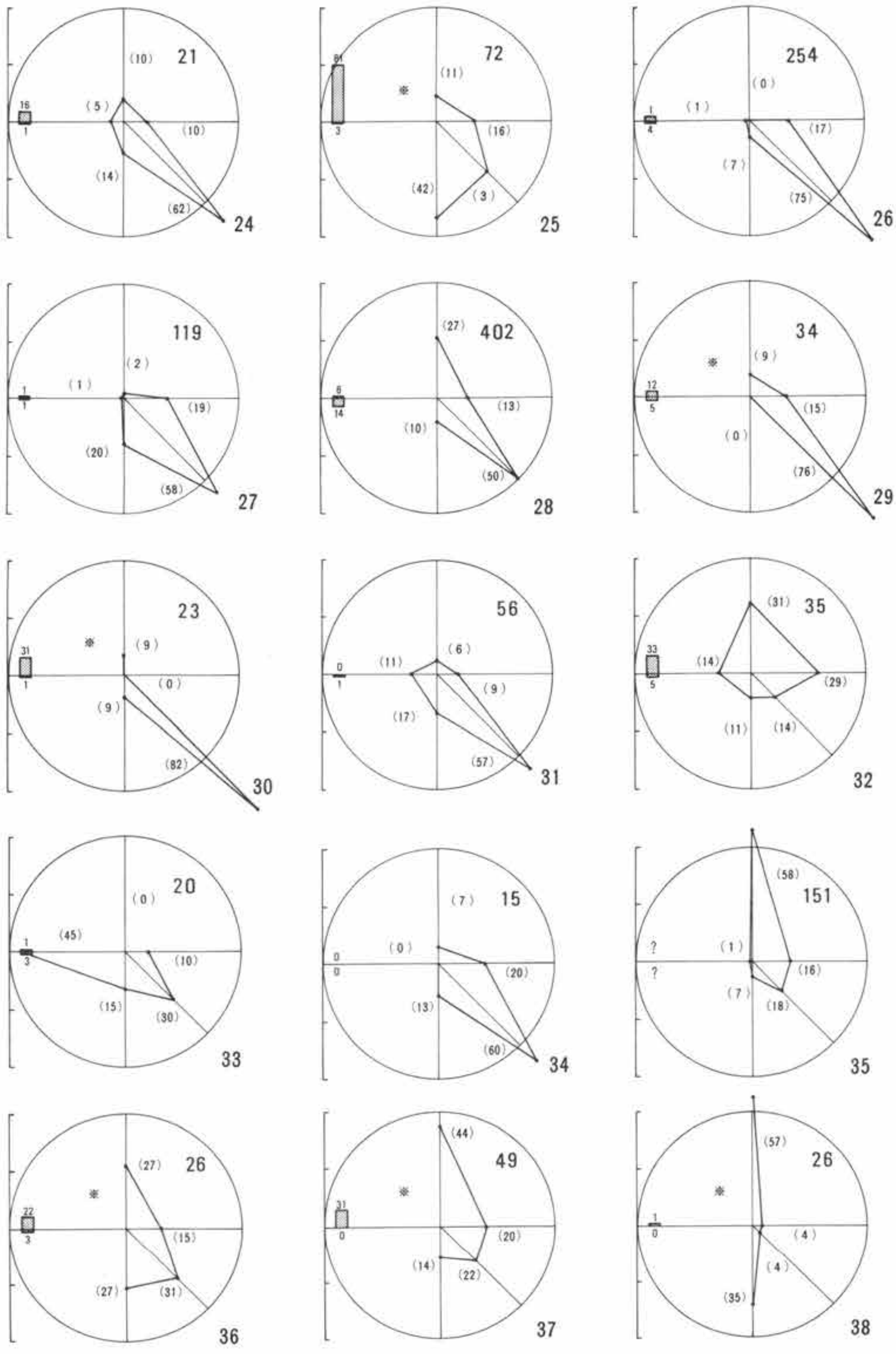
B地域では、貝の花貝塚(5)、若芝遺跡(6)、陣ヶ前貝塚(7)、金楠台遺跡(8)、中沢貝塚(9)、株木B遺跡第2地点(11)、宮本台遺跡(17)、藤崎堀込貝塚(19)の8遺跡の生産用具組成を見ると、中期に比較しⅠa類の減少とⅡabcde類の増加する傾向が強く見られる。特にⅡbcde類は石器組成に

おいて陣ケ前貝塚を除き50%以上の高い割合を占めている。これとは逆にⅠa類については、陣ケ前貝塚で20%と比較的高い割合を占めているが、他の遺跡では多くても数パーセントの値いで、若芝遺跡、宮本台遺跡、藤崎堀込貝塚では検出されていない。Ⅱa・Ⅳ類については、加曽利E期と組成上の占める割合はそれほどの変化が見られない。Ⅲ類については、土錘が集中して多く出土した遺跡はなく量的な減少傾向にあると言え、これに対してⅢab 類がそれほど極端でないが、増加傾向にある。このように本期は加曽利E期と比較し石器の在り方にかなり片寄りが見られ、また土錘、ヤス、釣針と言った漁具にも変化が見られるようになる。このような生産用具組成から考えられる生産活動は、Ⅰaの減少から狩猟活動の衰退が考えられる。しかし陣ケ前貝塚のようにⅠa類が依然大きな割合をしめている遺跡があること、そして貝の花貝塚では加曽利E期と比べイノシシ、シカの骨の量が著しく増加する結果が得られていることから、本期においても依然と活発に営まれていたと言える。そしてⅠa類の減少は、従来より行われてきた弓による捕獲方法と異なった道具、方法による狩猟が営まれていた可能性が考えられる。植物採集活動では、組成上の割合では、Ⅱa類はそれほど多くはないが、貝の花貝塚で200点以上も見られるなどこの道具を用いた採集活動は依然活発に行われていたと言える。しかしⅡ類については、Ⅱbc 類が極めて多く、植物採集行為の拡大と、調理・加工行為の発展がうかがえる。漁撈活動については、貝類ではハマグリ、シオフキ、アサリ、オキシジミが多く、魚類ではマダイ、クロダイ、スズキが多く、これら貝塚に残された骨の数を加曽利E期と比較すると、2〜3倍程に増えている。そして捕獲されたものを見ると内湾性の漁撈活動が中心であったと言えようが、外洋性魚類であるマダイが多く見られることは、漁場の拡大化が進められたと言えよう。このことは、土錘の量的減少に対して、ヤス、釣針などの漁具の増加によっても裏付けられることと思われる。

C地域では、矢作貝塚(22)、加曽利貝塚(23)、木戸作貝塚(26)、小金沢貝塚(27)、武士遺跡(29)、伊丹山遺跡(30)、山野貝塚(31)、祇園上深作貝塚(32)に見られる生産用具組成の在り方、特徴は、B地域のものとほぼ一致するものである。先に上げた8遺跡は、都川・村田川・養老川流域にある加曽利貝塚、矢作貝塚、木戸作貝塚、小金沢貝塚、武士遺跡(以上C_1地域)と小櫃川流域にある伊丹山遺跡、山野貝塚、祇園上深作貝塚(以上C_2地域)とに分けることができる。C_1地域では、Ⅰ類は矢作貝塚を除いて非常に少なく、対照的にⅡbc 類を主としたⅡB類が大きな割合を占めている。Ⅲ類については、土錘の数値が加曽利E期に比べ非常に低いものであり、またⅢab 類についても加曽利・矢作貝塚で比較的多く見られる他はそれほど多い数を示していない。このようなことからC_1地域における生産活動は、狩猟活動についてはⅠa類が少ないもののイノシシ、シカといった獣骨が加曽利E期以上に多くの量が検出されていることからB地域と同様な狩猟活動が行われていたと言える。また植物採集活動についてもB地域で述べたことと同

第3表　遺跡別生産用具組成表 (3)

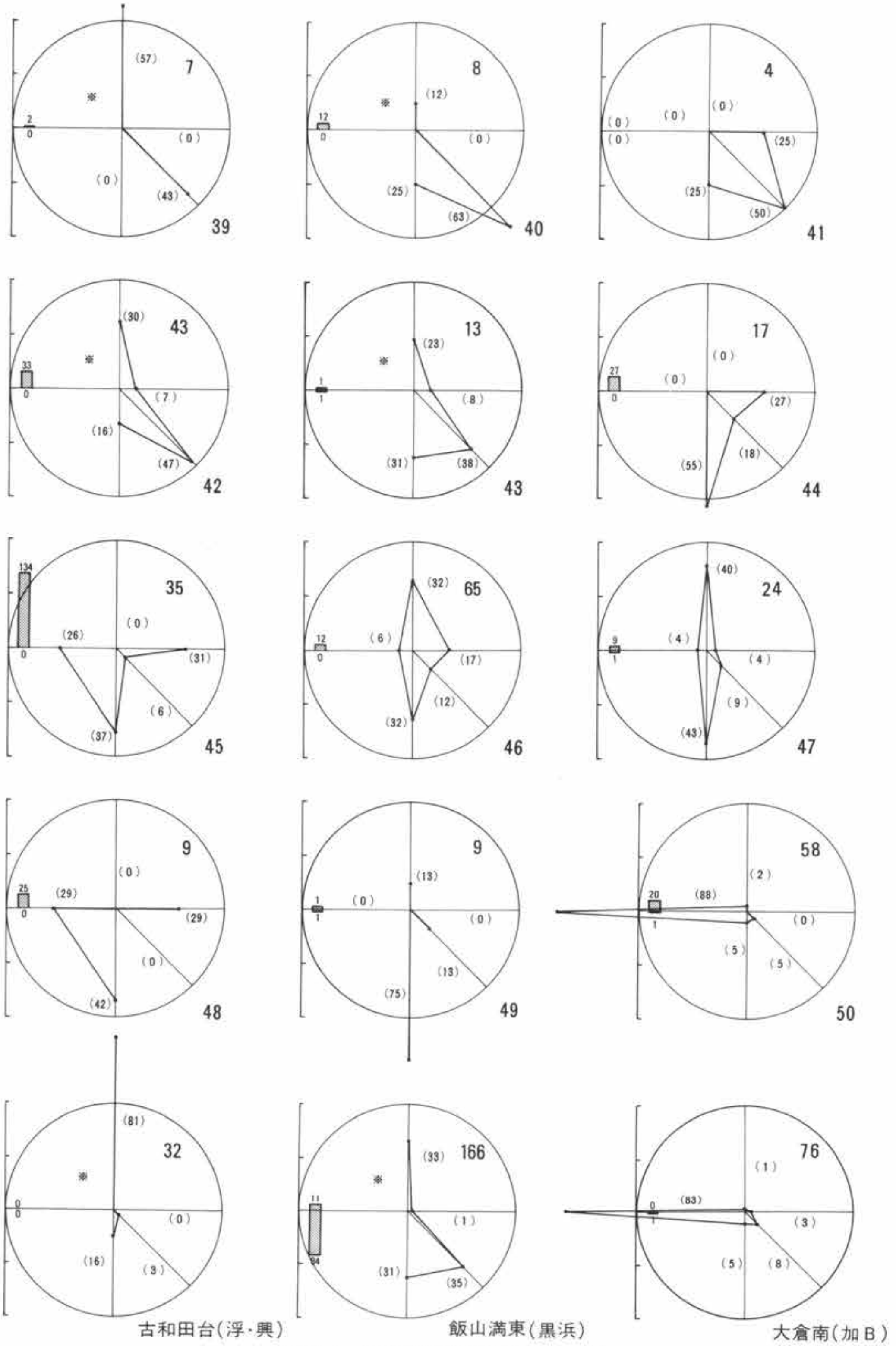
		27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
		小金沢	中野僧御堂	武　士	伊丹山	山　野	祇園上深作	一の宮貝殻	石　神	武　勝	生谷境堀	江原台	新　橋	中囲護台	加定地
		称・堀	加E末称	堀	堀	堀	堀	堀	称	加　E～　堀	加　E	加　E	阿	加　E	加E末～　堀
Ⅰ群															
A	a	2	108	(3)	2	3	11		1	88	7	21	(15)	4	
	b		1												1
B	c					2									
Ⅱ群															
A	a	23	52	5		5	10	2	3	24	4	10	1		
B	b	27	33	3	3	6		1	2	5	1	4		(2)	2
	c	19	117	12	7	13			3	3	5	2	1	(1)	3
	d	9	35	2	2	6	1		3	19		4			
	e	14	15	9	7	6	4	5	1		2	1			
Ⅲ群															
A	a	1	※	※	※	6	2	7		2	※	※	※	※	※
	b		※	※	※		3	2			※	※	※	※	※
	c	2	6	12	31		33	1			22	31	1	2	12
	d	1	14	5	1	1	5	3		?	3				
B	e		※	※	※	3	3				※	※	※	※	※
Ⅳ群															
	a	18	29		2	8	4	3	2	5	4	7	8		2
	b	6	1												
	c		7			1			1		2	2			
	d		4							2	1	1	1		
	e									2					
	f	1	5	2	2				5	1	53	22			



第４図　遺跡別生産用具組成図 (3)

第4表　遺跡別生産用具組成表 (4)

		41	42	43	44	45	46	47	48	49	50				
		御部殿台	龍角寺ニュータウン	桜谷津	三郎作	木之内明神	向油田	白井大宮台	阿玉台	大　浦	鉈　切		古和田台	飯山満東	大倉南
		堀	加　E	堀	阿	阿 加　E	阿	阿 加　E	阿	加　E ～　堀	称		浮　Ⅲ 興　津	黒　浜	加　B
Ⅰ群															
A	a		13	2			21	8		1	1		26	52	1
	b			1				1						2	
B	c			1				1	1		1			8	
Ⅱ群															
A	a	1	3	1	3	11	11	1	2					1	2
B	b		7	2				1			3		1	17	
	c	2	3	3			1			1				18	3
	d		10	3	1	2	3	1						} 59	2
	e				1		4								1
Ⅲ群															
A	a		※	※		9	4	1	2		29		※	※	61
	b		※	※							22		※	※	2
	c		33	1	27	137	12	9	25	1	20			11	
	d			1				1		1	(1)			84	1
B	e		※	※	6	(1)	3	2	1	1	4		※		
Ⅳ群															
	a	1	6	3	5	12	11	3	2	4				33	3
	b						1			2				2	1
	c		1				8	7			3		3	5	
	d												2		
	e				1	1	1						1	12	
	f		2	2	3								218		3



第5図　遺跡別生産用具組成図 (4)

じことが本地域でも言える。しかし漁撈活動については様相が異なる。その一つに、土錘、ヤス、釣針と言った漁具の少ないことが上げられる。そして捕獲の対象となった魚類についても、木戸作貝塚の分析によれば、アジ・イワシ類と言った干潟産種・沿岸海産魚がほとんどを占めている（小宮1979）という違いが見られる。木戸作貝塚での漁撈活動について小宮氏によれば、採貝漁法については、採貝場所として集落より3～4㎞前後の距離にある村田川河口付近のラグーンが推定され、採集された貝類の多くはハマグリ・キサゴ類と述べられている。また採貝方法としては抄網型もしくは曳網型の漁具の使用が可能性として高いものとされている。一方採魚漁法については、漁場は集落より約30㎞の範囲内にとどまる東京湾奥部とラグーン部であったと推定され捕獲された魚の主体となるものは、アジ・イワシ類と述べられている。そして漁法として漁網によるものの可能性が高いとされ、漁具には、木戸作貝塚でのⅢ類の少ないことからそれに代用されるものの存在が充分にあったであろうと述べられている(小宮1981)。このように本地域では、現在の我々が目にすることができる生産用具組成にはあらわれてこない多くのものを用いた生産活動がなされていたと言えよう。このことは本地域のみでなく他の地域においても、また他の時期においても充分に考えられることであろう。以上のことからC_1地域においても漁撈活動が活発に営まれていたと言える。また本地域においては特異な組成を持つ矢作貝塚については、Ⅱ類が比較的少なく、Ⅰ・Ⅲ類が多いことから定住性の薄い集落であったと考えられないであろうか。このように漁具が直接的生産用具の主要なものとなっていること、そしてその中には外洋性漁業に強く係わるものとされる釣針が多く含まれていることから、ここには漁撈活動を専業とした集団が営んでいたと考えるのは極論すぎるのであろうか。つづいてC_2地域については、先に上げた3遺跡は隣接した位置にあるが、山野貝塚、祇園上深作貝塚は矢作貝塚と似た組成を示し、伊丹山遺跡は木戸作貝塚等に似た組成をしめしている。この3遺跡での生産活動は自然環境から、また組成の上から見ても漁撈活動が重要なものであったと言えよう。そしてその漁法については、クロダイ、スズキ、アジ、イワシ類と言った内湾性のものが多いことから、漁網による方法が多く用いられたと思われる。また矢作貝塚同様に釣針も見られ、マダイ等の外洋性の魚類も比較的多く検出されており、外洋性漁業も営まれていたと言えよう。そして山野貝塚、祇園上深作貝塚は、漁撈を主要な生産活動として営まれた集落と言えよう。このように地理的に極く近い関係にある遺跡での生産用具組成で道具の片寄りに大きく違いが見られることは、各集落において、専業的生産活動が営まれ、そしてそれらの集落が有機的関係を保ちながら存在していたとは考えられないであろうか。生産活動の専業化、分業化を明らかに示す集落の存在は、後期後半から晩期にかけて明確に増える傾向にあることを考慮に入れれば、本期における集落にその兆候が見られる可能性は充分にあろう。

D地域については、加定地遺跡(40)、御部殿台遺跡(41)、桜谷津遺跡(43))見られるように、

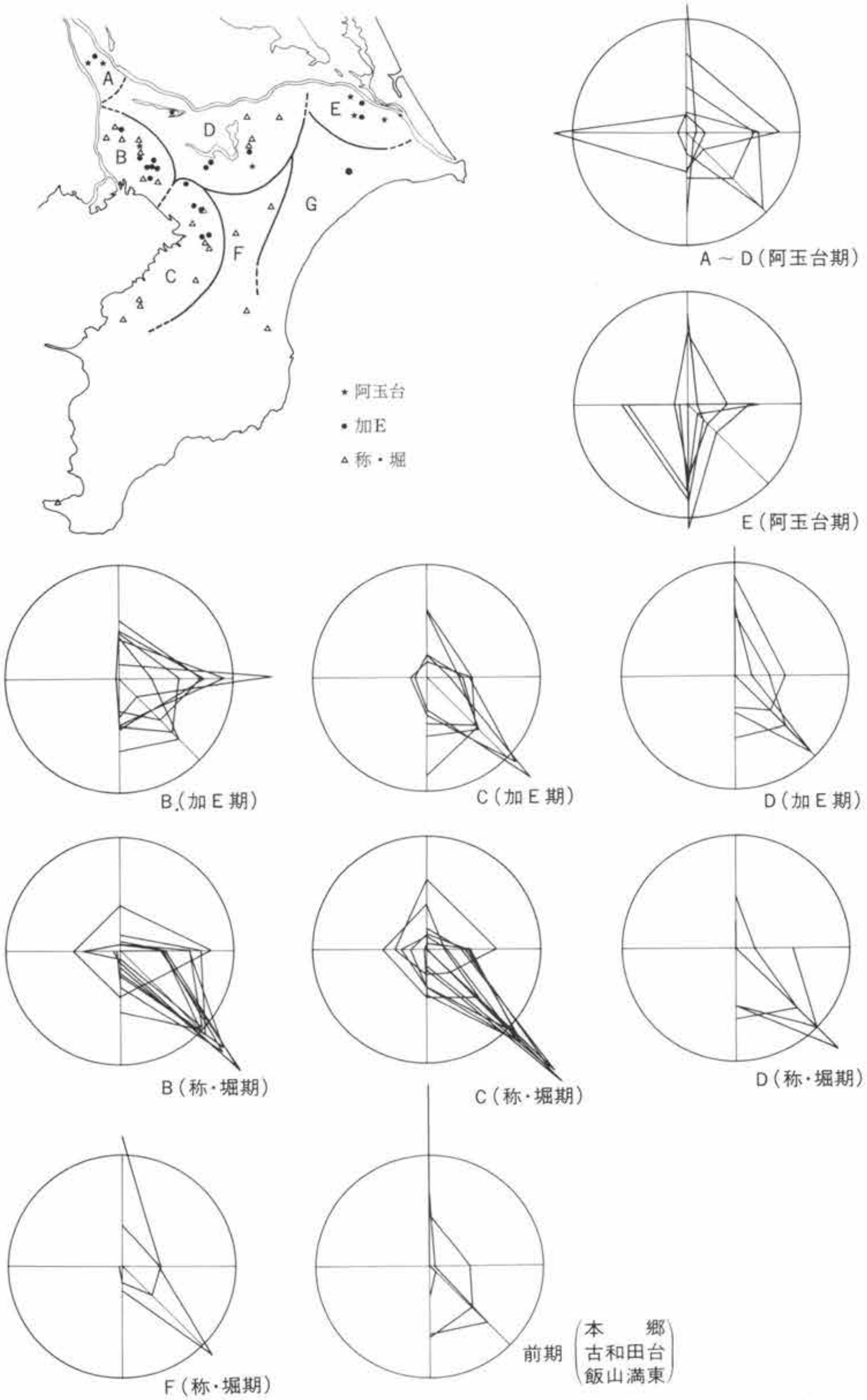
生産用具組成の在り方はB・C地域で多く見られたII類主体のものであり、各生産活動についてもほぼ同じことが言えると思われる。しかしこの地域での生産用具での大きな問題として加曽利E期でも述べたが、我々が遺跡より検出することのできた生産用具（石器）が極めて量的に少ないことが上げられる。従来より房総半島に所在する遺跡での石器数は少ないことが指摘されていたが、その中でも特にD地域は石器保有数の少ない地域と言える。このことは、遺跡に対する調査規模等の問題もあることと思われるが、現在調査中、整理中の本地域の加曽利E～堀之内期のものを見てもけっして多くなく、先に上げた3遺跡に近い傾向を示す。このような石器保有数の少ない遺跡については、そしてそれが地域的な特徴として上げられることは、この地域においての生産活動に石器をあまり使用していなかったと考えることが妥当と思われる。しかし本地域に集落が点在している事実から、その集落を営んだ人々の生活があり、そしてその生活は狩猟・漁撈・植物採集といった生産活動が基盤となっていたことは充分に考えられることであり、そしてそれは狩猟活動については、御部殿台遺跡よりニホンジカを主とした多量の獣骨の検出されていることから、漁撈活動については、土錘の存在から、植物採集活動については、II類主体の組成からそれぞれ判断できよう。この中で、石器を道具として多く用いられる生産活動は狩猟活動であろう。この生産活動における直接的生産用具に石鏃、石槍が代表的なものとして上げられ、特に石鏃（弓）の出現、普及が縄文時代の狩猟形態を確立させたものと言える。このように弓による狩猟方法は最も有効的方法と言え、また晩期においてもこの狩猟形態は発展することから見ても、本地域において弓による狩猟形態が充分に普及していたものと思われる。そして素材となる石の乏しい房総半島においてはそれに代わるべき素材を求め使用された可能性は充分にあったと考える。石の代用の最も可能性の高いものとしてはシカの枝角、イノシシ等の牙、骨が上げられ、また木や竹なども可能性として考えられよう。また狩猟は弓による方法の他に「ワナ」による狩猟方法が考えられる。ワナには陥し穴、くくりワナ、はねワナなどの各種を用いたと推定され、またシカのような群れを作るものに対しては、水上捕獲、崖落とし、柵内への追込み猟による大量捕獲法が推定できるとされている。(大泰司　1983)。以上石器の稀薄な地域における狩猟について述べたが、これらのうち実証できるものが現段階ではほとんど無く推定にとどまるが、充分に可能性のあることと考える。このようにD地域は、生産活動の在り方より道具の在り方に特徴が見られる地域と言える。

F地域には、中野僧御堂遺跡(28)、武勝貝塚(35)がある。本地域はA～E・G地域のように海に接した地域でなく、いわば房総半島における山間部と呼べる地域である。この2遺跡の生産用具組成の特徴として、石器総数が比較的多いこと、そしてその主体となるものがＩａ類であり、またIIａ・IIbc類も多くあり、これとは反対にIII類が比較的貧弱であることが上げられる。このような組成の特徴から、狩猟活動が他のどの地域よりも活発に営んだことがうかがえ、

また植物採集活動も、草根類、堅果類、蔬菜類といった広範囲の採集活動が営まれていたと考えられる。狩猟の対象としては、確かな数値は出されていないが、武勝貝塚より多量のイノシシの骨をはじめとし、シカ、タヌキ等が検出されていることから、これらが捕獲されていたのであろう。一方漁撈活動については、生産用具が貧弱であることやこの地域に規模の大きな貝塚が発達しなかったことから、この地域ではそれほど漁撈活動は盛んでなかったと言えよう。しかしこのことを逆に考えるならば、山間地域にも漁撈活動（海を対象としたもの）が普及していたことは、当時の人々に海がいかに魅力的なものであったのか、そしてそこにおける生産活動が優位なものであったのかが理解できるものと思われる。このように本期での房総半島では、漁撈活動が普及、発展し、生産活動の大きな部分を占めるものになったと言えよう。しかしいかに有効な生産活動であったとしても、それには地理的限界があったことが本地域における生産用具組成からうかがえる。

G地域は外湾に接した地域で、一宮貝殻塚貝塚(33)、石神貝塚(34)、鉈切洞窟遺跡(50)がある。これら遺跡の生産用具の特徴は、一宮貝殻塚貝塚、鉈切洞窟遺跡で顕著なようにⅢ類が非常に大きな比率を占める。Ⅲ類はB・C地域の内湾に接する遺跡のものとは様相を異にするものであり、釣針をはじめ銛、尖頭器と言った骨角器が多い。これらの道具は外湾性魚類の捕獲に適したものと考えられていることから、外湾性漁法による漁撈活動が活発に営まれていたと言え、また現在の九十九里浜周辺は当時ラグーンが形成されていたと考えられる場所であり、内湾性漁業も充分に行われていたであろう。狩猟・植物採集活動についてもⅠa・Ⅱ類の存在から、そして石神貝塚ではⅡ類が比較的顕著であること、またイノシシ、シカ等の獣骨が検出されていることから営まれていたと言えようが、生産活動の中心となったのは海での活動であったろう。特に鉈切洞窟については、Ⅲab類を主体とした漁具の多さと残された魚骨の多いこと、そして反対にⅠ・Ⅱ類の貧弱なことから、この遺跡を漁業基地的性格をもつものと考えられている。このように本地域では、外湾性漁業による漁撈活動が特徴として上げられるが、現段階のところ資料的に充分とは言えず、これが本地域における一般的なものなのかは、今後の課題となろう。しかしいずれにしろ、東北地方では多くの資料により指摘されていることであるが、本期において外湾性漁業が発展したことは充分に確認されることである。

以上縄文時代後期前半における生産用具組成の在り方を見てきた。これを加曽利E期と比較すると、Ⅰ類ではⅠa類の減少、Ⅱ類ではⅡbc類の増加、Ⅲ類ではⅢc類の減少とⅢab類の増加が上げられる。このような組成上に見られる減少、増加は、生産活動の技術的・方法的変革、発展によるものと考えられるもので、狩猟、漁撈、植物採集のいずれの生産活動においても大なり小なりの活発化がなされたものと考える。このことは、加曽利E期に比較的強く見られた各地域ごとの生産用具組成の特徴が本期には失われ均一化の傾向にあることから、生産活



第6図　地域別生産用具組成図

動におけるより有効的な技術、方法が確立し、より安定した経済基盤をもつことができたと言えよう。また均一化と反する専業的性格の遺跡も本期より多くなる傾向を示すが、このことも安定した経済基盤に立ってはじめてなしえたものと考えられるものである。

4．結　語

前章で、房総半島における縄文時代中期から後期前半までを阿玉台期、加曽利Ｅ期、称名寺・堀之内期の３期に分け、地形的・地理的条件により想定したＡ～Ｇ地域の石器を主とした生産用具組成を見てきた。そしてそこでは、自然環境のもつ特性と生産用具組成の特性が地域的にほぼ一致するものであることから、この時代の生産活動は、周囲の環境や地理的条件に大きく影響をうけたものであると言えよう。しかし同じ環境下にあったといえ、時の推移につれ生産活動は技術的、方法的な発展、変革がもたらされ、より周囲の自然に対する最も有効な生産活動の方法、手段を求め、食料獲得の安定性をより確固たるものにしていったと考えられる。そして縄文時代中期から後期にかけた時期が房総半島においては、その最も顕著な時期であったと言える。

阿玉台期では、前段階期の生産活動の主要をなした石鏃を多量に用いた狩猟活動が受け継がれたと同時に植物採集・加工活動や漁撈活動が活発化した時期でもある。特に漁撈活動においては、内湾性漁業が本期において確立したものと言え、特にＤ・Ｅ地域では、この漁撈活動にかなりの比重がかけられた遺跡が多い。

加曽利Ｅ期に移ると、Ａ・Ｂ・Ｃ地域の東京湾沿岸部を中心として、植物採集・加工活動、漁撈活動はさらに活発化し発展してゆく。植物採集・加工活動は、Ｂ地域では打製石斧が、Ｃ地域では石皿、磨石、凹石が多くなると言った用具の量的な差が見られるが、生産活動において重要な位置を占めるようになっている。そしてその技術、方法は本期において確立されたものと言える。漁撈活動については、生産用具の量的、質的な向上により発展がうかがえる。このことは貝塚の発達とそこから検出される多量の海産物の残骸、そしてそれらを伴う集落の発展によっても充分に裏付けられるものである。また漁法においては内湾性漁業から外湾性漁業へといった生産領域の拡大が徐々にではあるが強まっていく傾向が地域的に見られるようになる。狩猟活動については、石鏃の漸減から衰退する傾向にあるものと見られるが、貝塚からの獣骨類の検出例は、かならずしもその傾向は見られずむしろ増える傾向にあると言える。このことは、従来より弓を用いて行われていた狩猟方法になんらかの変革がもたらされたものと考えられよう。

この他の地域についても、以上述べた生産用具組成の在り方と同様なものが差こそあれ認め

られることから、組成の均一化が進んだ時期と言える。この組成の均一化は、先に述べてきた生産活動が各地域において周囲の自然環境に対し、最も有効かつ効率の良いものとして取り入れられた結果と言えよう。そしてそのことは、房総半島における縄文文化の発展の大きな要因となったものである。

称名寺・堀之内期に入ると、加曽利E期で見られた生産用具組成の様相がより強まったものとなり、均一化もさらに進んだものとなる。植物採集・加工活動では、打製石斧が組成比率でやや減る傾向を示すが、石皿、磨石等の加工・調理具はより大きな比率を占めるようになり、多様化しつつおおいに発展したと言える。漁撈活動においても、急増、拡大する貝塚の発達からおおいに盛行したと言え、特に外湾性漁業はより活発化する。そして集落の中には、漁撈活動を専業として営んだと考えられるものが徐々にではあるが増える傾向にある。このことは、均一化の中にあり、その地域もしくは集落において独自性の崩芽と言え、漁撈活動は、新たな技術の発展、そして生産領域の拡大により、より多様化され発展したと言え、当時の人々がいかに積極的に海へ進出していったことがうかがえる。狩猟活動は、石鏃の減少が顕著なものとなるが、イノシシ、シカの遺存体はいぜん増える傾向にあり、加曽利E期にもたらされた狩猟方法がさらに発展したものと言える。

以上のように、房総半島における縄文時代中期から後期前半にかけての生産活動の流れを見てきた。この時期の房総半島は「貝塚文化」として特徴づけられる地域である。確かに内湾性漁業を中心とした食料源の豊かな海への進出が本地域の文化の発展に大きく関与したことは充分理解されているが、これほどまでに文化の発展が成し遂げられたのは、漁撈活動のみでなく狩猟、植物採集といった周囲を取り囲んだ自然環境に対し、多画的な生産活動の展開発展が成し遂げられ、その結果最も有効かつ効率の良い生産活動を営むことが可能となったことによることを充分に理解されなければならないであろう。

最後に房総半島の遺跡での生産用具が他の地域と比較して稀薄であることが従来より指摘されていることに少し触れてみたい。房総半島での生産活動は、いままで述べてきたように他の地域を優るほど活発であり、大きな発展を成し遂げてきた。そこには当然、生産用具の量的質的発展、発達がなされたと考えられる。しかし、生産用具の中には、その素材により遺存率の低いものも多く用いられたと思われ、現在の我々が目にすることのできるものは、極く一部の生産用具でしかない。よって現在残された生産用具から当時の生産活動の在り方を把握するのに、すでに消滅してしまった生産具の存在も充分に考慮されて行われなければならない。本地域の場合、生産活動の中心となった漁撈活動における生産用具の多くは、遺存率の低い素材（骨、角、木、植物繊維など）を用いたことが考えられる。また石材の貧しいこの地域では、他の生産用具でもそれに代わる素材を多く用いていたことも充分に考えられよう。よって現存

する生産用具により生産活動を把握しようとする場合、その遺跡または地域の自然的諸条件を充分に理解されなくてはならないと言えよう。

生産用具組成表、グラフ作成参考文献

1.『山崎貝塚』野田市文化財抄報7　野田市教育委員会　1976

2.「水砂遺跡」常盤自動車道埋蔵文化財報告書Ⅰ（財）千葉県文化財センター　1982

3.『野田市本郷遺跡発掘調査報告書』　野田市本郷遺跡調査団　1980

4.「布瀬貝塚」『印旛・手賀』　早稲田大学考古学研究室　1961

5.『貝の花貝塚』松戸市文化財調査報告第4集　松戸市教育委員会　1973

6.「若芝遺跡」松戸市文化財調査小報15　松戸市教育委員会　1982

7.「陣ケ前貝塚」松戸市文化財調査報告第1集　松戸市教育委員会　1963

8.『松戸市金楠台遺跡」（財）千葉都市公社　1974

9.『中沢貝塚』鎌ケ谷町史編さん委員会　1965

10.『西山遺跡』鎌ケ谷町史資料集6　鎌ケ谷町史編さん委員会　1970

11.「株木B遺跡」市川東部遺跡群発掘調査報告　市川市教育委員会　1983

12.『今島田遺跡』市川文化財調査報告第1集　市川市教育委員会　1963

13.『海老ケ作貝塚』船橋市教育委員会　1972

14.『高根木戸北』船橋市教育委員会　1971

15.『高根木戸』船橋市教育委員会　1971

16.『沢之台遺跡発掘調査報告』沢之台遺跡発掘調査団　1980

17.『宮本台Ⅰ・Ⅱ』船橋市教育委員会　1974

18.『中野木新山遺跡』中野木新山遺跡調査団　1977

19.『習志野市藤崎堀込貝塚』習志野市教育委員会　1977

20.「すすき山遺跡」貝塚博物館紀要第5号　千葉市加曽利貝塚博物館　1972

21.『千葉市荒屋敷貝塚』遺構確認調査報告書（財）千葉県都市公社　1974
『千葉市荒屋敷貝塚』貝塚外縁部遺構確認調査報告（財）千葉県文化財センター　1976　『荒屋敷貝塚』貝塚中央部発掘調査報告（財）千葉県文化財センター　1978

22.『千葉市矢作貝塚』（財）千葉県文化財センター　1981

23.『加曽利貝塚Ⅰ』中央公論美術出版　1971　『加曽利南貝塚』中央公論美術出版　1976　『加曽利北貝塚』中央公論美術出版　1977

24.「千葉市平山町菱名貝塚調査概報」貝塚博物館紀要第2号　千葉市加曽利貝塚博物館　1969

25.『南二重堀遺跡』千葉東南部ニュータウン12（財）千葉県文化財センター　1983

26. 『木戸作遺跡（第2次）』千葉東南部ニュータウン7（財）千葉県文化財センター　1979
27. 『小金沢貝塚』千葉東南部ニュータウン10（財）千葉県文化財センター　1982
28. 『中野僧御堂』(財）千葉県文化財センター　1977
29. 『武士遺跡』武士遺跡発掘調査団　1976
30. 『袖ケ浦町伊丹山遺跡』伊丹山遺跡発掘調査団　1979
31. 『袖ケ浦町山野貝塚』（財）千葉県都市公社　1973
32. 「木更津市祇園上深作貝塚」日本考古学年報9　日本考古学協会編さん　1956
33. 「千葉県一宮貝殻塚貝塚調査報告」史前学雑誌第9巻5号　1945
34. 「茂原市石神貝塚」日本考古学年報15　日本考古学協会編さん　1962
35. 「山武郡武勝貝塚」日本考古学年報12　日本考古学協会編さん　1959
36. 「生谷境堀遺跡」『飯重』佐倉市教育委員会　1974
37. 『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書II』（財）千葉県文化財センター　1980
38. 『新橋遺跡発掘調査報告』富里村村史編さん委員会　1978
39. 「成田市中囲護台遺跡発掘調査報告」成田市遺跡調査報告第1集　成田市教育委員会　1973
40. 「成田市加定地遺跡発掘調査報告」成田市の文化財第9号　成田市教育委員会　1977
41. 「成田市御部殿台遺跡の研究」小川和博　史館5、7号　1975、1976
42. 「№4地点」『龍角寺ニュータウン遺跡群』　龍角寺ニュータウン遺跡調査会　1982
43. 『桜谷津』　桜谷津遺跡発掘調査団　1977
44. 「千葉県佐原市三郎作貝塚（第1次調査）」西村正衛　学術研究第20号　早稲田大学教育学部　1971
45. 「千葉県小見川町木之内明神貝塚」西村正衛　学術研究第18号　早稲田大学教育学部　1969
46. 「千葉県香取郡八都村向油田貝塚発掘概報」　西村正衛　古代7、8合併号　早稲田大学考古学会　1952

「千葉県向油田貝塚出土の石器」斉木勝　古代第57号　早稲田大学考古学会　1974

47. 「千葉小見川町白井大宮台貝塚」斉木勝　考古学雑誌第59巻第1号　1973
48. 「千葉県小見川町阿玉台貝塚」西村正衛　学術研究第19号　早稲田大学教育学部　1970
49. 「大浦貝塚」八日市場市史上巻　八日市場市史編さん委員会　1982
50. 『館山鉈切洞窟』　千葉県教育委員会　1958

『古和田台遺跡』　船橋市教育委員会　1973『飯山満東遺跡』　房総考古資料刊行会　1975
『千葉県香取郡大倉南貝塚』　西村正衛　金子浩昌　古代21、22合併号　早稲田大学考古学会　1956

主要参考文献

江坂輝弥：「生活の舞台」『日本の考古学II』　河出書房　1965

岡本　勇：「労働用具」『日本の考古学II』河出書房　1965
岡本勇・戸沢充則：「縄文文化の発展と地域性、関東」『日本の考古学II』河出書房　1965
小澤清男：「房総半島における縄文時代出土の植物種子をめぐって」　貝塚博物館紀要 9　千葉市加曽利貝塚博物館　1983
加藤晋平・小林達雄・藤本強編：『縄文文化の研究 2　生業』　雄山閣　1983
加藤晋平・小林達雄・藤本強編：『縄文文化の研究 7　道具と技術』　雄山閣　1983
加藤晋平・佐原真・西田正規：「定住革命と縄文人」　歴史公論№94、1983
加藤晋平・佐原真・小池裕子：「環境史における人間と動植物」　歴史公論№103　1984
金子浩昌・丹羽百合子：「貝塚出土の動物遺体」　貝塚博物館研究資料第 3 集　千葉市加曽利貝塚博物館　1982
後藤和民：「原始集落研究の方法論序説」　駿台史学27、1970
小林康男：「縄文時代生産活動の在り方(1)(2)(3)(4)」　信濃26―12、27―2、4、5　1974、1975
小宮　孟：「貝塚産魚貝類の解析と課題」　千葉県文化財センター紀要 6　1981
鈴木道之助：『図録石器の基礎知識III、縄文』　柏書房　1981
種田斉吾：「房総における縄文中期末の石器群について」　千葉県文化財センター紀要 2　1977
日下部善己：「縄文時代の東日本における生産用具の時間的空間的様相」　福島考古13、1972
村田文夫：「関東地方における縄文前期後半期の生産活動について」　古代文化22―4　1970
渡辺　誠：『縄文時代の漁業』　雄山閣　1973
渡辺　誠：『縄文時代の植物食』　雄山閣　1975
渡辺　誠：『縄文時代の知識』　東京美術　1983